

KELES Newsletter No.7

関西英語教育学会ニューズレター No.7

事務局：〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

関西大学 外国語教育研究機構 吉田信介研究室内

Tel : 06(6368)0477 e-mail : keles@infoseek.jp URL : <http://keles.hp.infoseek.co.jp/>

2007年3月26日発行



師道復権—心窓に去来すること—

ひとたび無くした資格や権利を回復することが復権ですから、師道復権と言え、師道は既に失われていることを含意していることになり、はたして師道は既に失われてしまっているのでしょうか。

連日のマスコミ報道に教育関連の話題が登場しない日は無いほどに、さまざまな教育問題が浮上しています。教師を公然と悪し様に批判し、誰にでも(?)教えられるのだから、もはや教師などは不要と言わんばかりの様相を呈しています。

こういった風潮に歯止めをかけるための政府の対応は遅きに失した感はあるものの、法令改定の動きとして表面化しています。特に、昨年12月15日に「改定教育基本法」が参議院本会議で可決・成立の報道は、第二次世界大戦終了以降のニュースでは、教育界では最大のニュースだったように思えます。教育の憲法と言われる「教育基本法」が施行されたのは昭和22(1947)年3月でしたから、約60年間、本邦教育の拠りどころとしての役割を担ってきたことになり、その基本法の改定ですから、マスコミの話題が教育関連報道に集中したのも当然と言えます。

年明け以降、教育再生会議の答申、中央教育審議会の答申を受けて、「地方教育行政法」、「教員免許法」、「学校教育法」の教育改革関連三法が確定するような状況です。賛否両論が連日、マスコミの話題となっています。教育は国家100年の大計ですから、議論百出は当然の成り行きでしょうか。

いずれにいたしましても、昨年から今年にかけては歴史に残る、特に教育史には特筆大書して記録される年になることは間違いなさそうです。

教育にも不易なところと流行で変わるところはありますから、制度・組織・等が時代とともに変化するのは当然かも知れません。今回の改訂が教育に如何なる影響を与えるか、は後世の批評家に判断を委ねることにいたしましょう。

教育の不易なところは、時と所を越えて、真理の探究にあることはあえて述べるまでも無いことです。専門職である教員は学習者(児童・生徒・学生)が真理を探究して成長(人格形成、社会常識の育成、人類が築きあげている文化遺産の学習、等)し続けることを心から願い、成長を助ける役割を担っています。これこそ教育の不易なところである、と言えます。教員には専門職としての立場を維持し続けるために絶えざる研鑽・研修が必要であるゆえんです。

英語教育はどうでしょうか。指導理論・方法・技術にも流行と不易は適用可能でしょう。外国語教育分野の流行は、華々しいと表現できそうです。最終目標は、多様な学習者各自が懐く到達目標を達成できたか否かで判断(評価)されます。そのための援助を効率良く行うのが良い教員である、は不易と言えます。

本学会で連続開催中のセミナー(今年度からワークショップ形式)は、不易を目標に、流行の研修も実施中です。師道復権のために頑張ろうではありませんか。

瀬川 俊一(京都府立大学名誉教授)

第11回研究大会のお知らせ

日時：2007年5月26日(土)、27日(日)

会場：摂南大学寝屋川学舎

《発表者募集について》

5月26日：研究発表、実践報告(発表20分+質疑応

答10分)、シンポジウム(90分)

5月27日:研究発表、実践報告(発表20分+質疑応答10分)、ワークショップ(60分)、講演

・申込み方法:

学会HPの専用フォーム(作成中)より次の情報を入力して送信してください。1)氏名、2)所属、3)メールアドレス、4)タイトル、5)発表要旨(和文200字程度または英文80語程度)、6)キーワード(三つ)、7)発表の種類(研究発表・実践報告・ワークショップ)

学会誌『英語教育研究(SELT)』への投稿資格者は、原則として研究大会発表者に限ります。

・発表申込期間:4月1日(日)~4月30日(月)

・発表要旨:5月初旬に学会HPに掲載します。

・発表資格:

1)共同発表者を含めて、発表者は全員会員である必要があります。

2)昨年度より継続会員の方も新規入会の方も、発表者は全員5月10日(木)までに2007年度会費の納入を完了してください。

3)上記入金が確認されない場合は、発表が取り消されることがあります。

・プログラム:5月初旬に郵送予定です。

《講演について》

・講師:東 照二氏(立命館大学大学院教授)

・演題:「歴代首相の言語力:小泉スタイルと安倍スタイル」

・講師紹介:早稲田大学卒業後、テキサス大学で言語学博士号取得。専門は社会言語学。著書に、『歴代首相の言語力を診断する』『社会言語学入門』『親しさを増す英語—Polite EnglishからFriendly Englishへ』『丁寧な英語・失礼な英語—英語のポライトネス・ストラテジー』(以上、研究社出版刊)などがある。

《シンポジウム募集について》

26日にはシンポジウムの時間帯を設けております。奮ってご応募ください。下記の情報を事務局[syoshida[AT]ipcku.kansai[hyphen]ju.ac.jp]までお送りください。

1)全員の氏名、2)全員の所属、3)代表者のメールアドレス、4)タイトル、5)概要(和文800字程度または英文200語程度)

第10回卒論・修論研究発表セミナーの報告

第10回卒論・修論研究発表セミナーが2月10日

(土)に関西大学千里山キャンパスで開催されました。参加者は200名近くに及び、過去最多の参加を得ました。

発表者も過去最多で55名(卒論17名・修論38名)で、いずれもこれまでの研究を集約した熱のこもった発表でした。それぞれの論文発表の後には、活発な質疑応答がなされ、参加者のみなさんやコーディネータの先生と発表者との間で有意義なディスカッションが展開されました。発表に対しては、時には厳しい指摘もあったようですが、全体的に丁寧で暖かい助言が多かったように感じました。これは、他の学会活動には見られない、卒論・修論研究発表セミナーならではの光景に思えます。ただ、非常に申し訳なかったのは、事前にプログラムの詳細を会員のみなさまにご紹介できなかったことです。今年度は発表の申し込み期限を従来よりもかなり遅らせましたので、このような事態を招いてしまいました。セミナー責任者として深くお詫び申し上げます。改めまして、別紙にてプログラムの詳細をお知らせいたします。

卒論・修論研究発表後のイベントとして、今年度はシンポジウムを開催しました。ここ数年は、スペシャル・トークという講演形式で行われてきましたが、第10回という節目のセミナーということもあり、特別企画としてのシンポジウムでした。渡邊時夫氏(清泉女学院大学)と大津由紀夫氏(慶應義塾大学)のお二人をシンポジストにお招きし、「小学校英語教育必修化をめぐって—学校英語教育を考える—」というテーマのもと、竹内理氏(関西大学)がコーディネータしてくださいました。渡邊先生は賛成派の立場、そして、大津先生は慎重派の立場で意見を述べていただき、ディベート+フロアとの質疑応答・意見交換という形で進行了ました。2時間半という時間を感じさせないほど、あっという間に過ぎてしまいました。

セミナー終了後に行われた懇親会は、発表者の方々やシンポジストの先生方を中心に、40名近くの方々に参加してくださいました。親しみやすい雰囲気の中、大学の垣根を越えて談笑している学生さんたち、教員と学生という間を越えて和やかに歓談もしくは議論(?)している姿など、微笑ましい光景があちらこちらで見られました。

反省すべきことは多々ありますが、来年度以降

もさらに充実した行事にしていきたいと考えておりますので、みなさまの積極的な参加を何卒よろしく願いいたします。

藪内 智(京都精華大学)

《シンポジウム報告》

小学校での英語必修化に賛成か、反対か。フロアは反対派が若干優勢であったが、「今のままで反対」という声も聞かれる中でシンポジウムが開始された。渡邊先生は「条件付き賛成」のお立場から、大津先生は「反対」のお立場から話された。その後、フロアからの質疑を受けて、お二人がさらなる議論を展開され、シンポジストと会場が一体となったシンポジウムは2時間を超えたが、あっという間に過ぎ去った。

渡邊先生は、(小学校に限らず)英語教育の目標がコミュニケーション能力の育成のみならず、いわゆる多文化共生へつながる異文化理解をも含めるべきというお立場から、小学校英語を必修化するための三つの「条件」を、具体例を交えながら提示された。1)多くの小学校で現在実施されているような、歌と踊りによる活動だけでは不十分で、そこに「文化的な気づき」をもたらす内容を盛り込むこと、2)日本人教師を中心に活動を進めることで、英語を世界共通語として位置づけ、いわゆる日本人英語に対する意識を変革すること、3)小学校と中学校が単に「連結」するのではなく、英語教育の方法などを相互に工夫しながら「連携」していくこと、の必要性が論じられた。

一方、大津先生は、小学校英語の必修化は「必要なし、害あり、益なし。よって廃すべし」とのお立場から、その理由および代替案を提示された。必修化反対の主な理由は、その目的が十分に議論されていない中で、「英語」という一外国語を「必修」として小学校に導入するのはあまりにも危険である、とのこと。それよりもむしろ、小学校で必要なのは、英語、日本語、手話などを包括した「ことば」の教育であると主張された。つまり、「ことば」への気づき(=メタ言語意識)を育成することにより、子どもの創造性を育成する言語教育が、小学校の子どもたちには大切だと論じられた。

熱のこもった両先生のご提案に対するフロアからの質問は、臨界期仮説などの習得論に関するものから実践論に関するもの、さらに日本における英語の捉えられ方といった言語政策論に関す

るものまで、多岐にわたった。

「条件付き賛成」と「反対」という対立した立場からの議論であったが、渡邊先生と大津先生に共通するご意見も伺い知ることができた。それは、今後より多くの日本人が英語の運用能力を高める必要があるが、そのためには、現行の英語教育には改善が必要だ、という点であった。もちろん、最終的に賛成、反対どちらがよいかについて結論が出たわけではなかったが、大津先生のお言葉を拝借するならば、「自分の頭を使って考えることが重要」であることは間違いのないようである。

池田 真生子(姫路獨協大学)

KELES第3回セミナー(京都地区)の報告

12月16日(土)あわただしい師走をひと時忘れさせる悠々たる龍谷大学深草学舎にて、「より良いテストをめざして」28名の先生方が参会されました。ネットワーク接続による作業を組み込んだセミナーの予定でしたが、年末のせいなのか、図らずも講師の胸騒ぎが的中し先方サーバーがダウンするというハプニングとなりました。復旧が見込めないにもかかわらず、清水先生のにこやかに落ち着いたご挨拶に引き続き、明解なご講義・ご指導が繰り広げられました。

まず、「教育における測定の難しさ」を再認するため、テストの定義“A task or series of tasks used to obtain systematic observations presumed to be representative of education.”と項目の定義“A unit of measurement with a stimulus and a prescriptive form for answering; and, it is intended to yield a response from an examinee from which performance in some psychological constant.”を示されました。物理的なモノを測る場合には、既存の道具を使い、同時に多くの人びとに既に共通の理解を得ている単位で表すことができるため、問題は起こらないが、学習態度やモチベーション、英語力といったものを測る時には、どうだろうと持ちかけられ、当日のワークショップで参加者が考えるべき視点を与えられました。そして、測定したテスト結果が必ずしもTrue Scoreにはならない、常に何らかのエラーを伴うものであること、“No Test is Perfect!”であると、念を押されました。

テスト作成過程は、テストの評価、テスト開発(修正)、テストの実施の3段階を常に螺旋状に繰

り返すものであり、テストの基本として、妥当性 (validity)、信頼性 (reliability)、実用性 (practicality) を高めることを目指すべきであるということ。良いテストとは、受験者の持っている情報をうまく引き出し、実力以上のものを測定してしまわないようなもので、以下の8点を考慮すべきであるということでした。1) わかりやすいテスト指示文、2) 代表性のある問題、妥当性のある問題数、3) 採点基準の明確さ (信頼性、誰が採点しても同じ結果)、4) 実行性・実用性 (設備、コスト、人的資源の面)、5) 難易度 (受験者レベル)、6) 目的にかなったテスト、7) 全体の構成、順番、レイアウト (紙面での位置関係)、8) 採点のし易さ (大勢の採点)。

次に種々のテスト形式から多肢選択問題に着目し、その長所短所をあげられました。長所としては、多くの領域をカバーできるため信頼性があり、学習者に対する教師の先入観から来る影響を避けることができ、統計分析がし易い、採点が楽であるなどがあげられました。また、短所としては、作成に非常に時間がかかる、書く力をテストできない、思考過程を示さない、当て推量を促すなどでした。このような特徴を捉えた上で、作成段階として、1) 全体のテスト目標をたてる、2) 具体的細目表 (Specification) を作る、3) 問題試案の作成と検討、という手順で、参加者に実際に多肢選択問題の作成を促されました。

配布されたハンドアウトのフォーマットに従い、上記3段階の手順で、参加者は各自、問題作成に移り、その後、作成した問題をチェック項目に従って self- and peer evaluation を行いました。ここで、項目分析とは何を指すべきかの初歩の初歩を体得し、ようよう項目分析の入り口へと導いていただきました。

項目分析とは、テスト結果の解釈やテストの改善のためには、テスト実施後に不可欠な作業であり、次の6段階から成るものです。1) 採点し、合計点を出す、2) 合計点に基づき、ソートをかける、3) 各項目について、正答者の数を受験者数で割る、4) ソートをかけた順位を基に、上位27%を上位群、下位27%を下位群とする、5) 上位群の各項目での正答者数を上位群の総数で割る。同様に、下位群の各項目での正答者数を下位群の総数で割る、6) 前者から後者を引く。

この分析をネットワークで行う予定でしたが、

サーバーの休止により急遽オフライン作業となりました。事前に講師が用意された分析結果の印刷情報を用いて、参加者は項目分析の初歩の議論を行うことができました。講師の周到なご準備のため不慮の事態にもかかわらず、結果をどう読み取り、どう評価するかを具体的に体得することができ、またひとつKELESセミナーが実りをあげました。

実際の項目分析結果を得るためのWEBサイトURLは、以下の通りです。その他紹介された有料ソフトウェアも列記いたします。

SURVEY Reaction com.

<http://www.surveyreaction.com/itemanalysis.asp>

ITEMAN for 32-bit Widows Version3.6

(Assessment Systems Corporation)

倉本 充子 (広島国際大学)

KELES第4回セミナー(奈良地区)の報告

奈良地区セミナーは、1月27日(土)、本年も天理大学英语教育研究会と合同開催の形を取って実施されました。またJALT Nara Chapter、NET Forum (県内の中高の先生方による自主研究会)にも共催に加わってもらい、県内外から来られた英語教育に関わる様々な校種の教員、学生、約100人が参加しました。奈良地区セミナーの特色は、KELESだけでない学会・研究会が相乗りで参加して交流を深め、お互いから学びあうことをモットーにしていることです。今回も多数のネイティブ教員やALT、さらには英語圏・非英語圏からの留学生の参加も得て、発表の使用言語もできるだけ英語にしようという方針でセミナーは進み、すべての発表者が報告の全部もしくはサマリーを英語で実施しました。

今年度はテーマを「 だけじゃない英語教育」とし、日ごろとは違った観点から英語教育を考える試みを目指しました。実践報告では、まず奈良教育大学附属中学校の出井義雄氏から、「生徒を育てる英語指導」と題して、コミュニケーション活動を通じて「頑張る・頑張らう」仲間作りを目指す取り組みが報告されました。次に大阪府立勝山高校の松下信之氏から「Breaking the Barrier」と題する報告を受けました。生徒をひきつける多用で魅力的なシラバスを基にした英語IやOCの授業を通じて、入学当初学習意欲が決して高くはない高校生たちが、英語での諸活動を楽し

み、また彼ら自身も変わっていく姿が、ビデオを使って示されました。シンポジウムでは県内に勤務する3名のALTによる「めったに聞けない英語教育の利点」と題した、スキル育成以外の英語教育の可能性についての報告がありました。インド系南アフリカ人Chetan Rama氏からは、南アのポスト・アパルトヘイトと言語政策の課題について、米国のRobert Vassar氏からは小学校でのチャンツ利用から、はてはアメリカからゴスペル・クアアを招いての高校をあげた感動的な取り組みにいたるまでの、英語学習における音楽の可能性についての発表がありました。最後にNina Watson氏からは、多文化共生社会を目指すイギリスでの多言語教育の意義と英語の果たす役割について、ご自身が学習した様々な外国語とそれを基にしたアフリカ諸国でのボランティア活動の体験についての報告がありました。最後の講演会では、ご自身の研究だけでなく中高の現場に密着した活動をされておられる、KELESの評議員でもある関西大学の竹内理氏から「Communicativeだけでない英語教育」という演題でご講演をいただきました。先生の実施された「達人」の研究から、ESLの理論に縛られず、EFL環境に適合した折衷的アプローチを取る必要性が、ユーモアを交えて分かりやすく説明され、会場の参加者一同が「目から鱗」状態を体験しました。セミナーの最後には恒例のスナックパーティが催され、年齢・国籍を問わず参加者一同が打ち解け合い、長いセミナーを終えました。今回も、KELESからは瀬川会長と岡会計担当幹事にご参加いただき、開会から閉会までお手伝いいただきましたことに、深く感謝いたします。

中井 英民(天理大学)

KELES第5回セミナー(和歌山地区)の報告

今年のセミナーは、今までと形式を変え、午前中にワークショップ、午後は、中学校の先生と高等学校の先生の実践報告と、講演とし、出来るだけ現場の先生に来ていただくために、修士論文に基づいた研究発表をとりやめた。講演は、現場の先生の刺激のために、和歌山大学のアメリカ人教員に英語での講演を依頼した。また、交通の便を考えて、今年度も和歌山市民会館を使用した。また、小規模ながら、車で来られる先生方のために

茶菓で英語教育について語り合う懇親会も企画した。

ところが、こちらの意に反し、ワークショップは事前に申し込みを受けつけ、ある程度の人数が来られると思っていたのだが、かなりの方が、申し込みはしたものの、結局は来られないという結果に終わった。そのため、参加人数は、昨年とあまり変わらない状態だった。しかし、大半の方が午前中から午後まで通して参加していただき、一般的には成功だった。

奥田 隆一(和歌山大学)

《ワークショップ》

「英語の語彙指導を考える」

奥田 隆一(和歌山大学)

本年度よりワークショップ方式で開催中の「KELES第5回セミナー(和歌山地区)」が3月17日(土)午前9時半より和歌山市民会館において開催されました。

講師の奥田先生は、「語彙指導のために、教員側に求められるものと、生徒に求められるもの」を列挙する課題を投げかけ、全参加者が約5分間で筆答し終わるのを待って、本論へとワークショップを展開されました。参加者の解答を例として取り上げながら、「英語の単語の意味とは」への答えを探る講義と演習を展開していかれました。

(1)英語から日本語へ、その逆の日本語から英語への、あたかも、「英語=日本語」の公式が一对一の対応関係で成り立っていると考える危険性を、具体例で紹介された。water, roof, hand, climb, cold, rice, mountain等の初歩的・基本語彙の意味分野が必ずしも一对一の対応関係にはないことを説明(例: waterは水と湯、coldは寒いと冷たい)の後、動詞のlend, borrow, rentと貸す、借りる、の関係へと例証しながら、説明が続いた。

(2)電車、自動車、自転車は車が付くのに、英語ではtrain, car, bicycleと違う語を使うのは何故か、の問いに答える説明として、collocateとしての多義語の解説が行われた。batを例にすれば、fly, ball, cricket, cave, baseball, dark, hit, blind等をあげることが出来る。

(3)上位語と下位語の概念を、教師は理解して指導する大切さを指摘するのが、次の課題であった。hat vs. cap, finger vs. thumb, book vs. dictionary, furniture vs. refrigerator等を例にして、hatにはcapの意味も含意されるから、hatは上位語でありcap

はhatの下位語である、等の説明が続いた。

(4) コロケーションとして語彙を理解する重要性の指摘が、次の課題であった。一例として、形容詞と名詞の結びつきが課題として取り上げられた。形容詞large, great, big, majorと名詞problem, amount, shame, manとの結びつきが可能か否かの練習問題に、参加者は辞書に頼らないで真剣に取り組んだ。ここで小休止して、読者の方々も辞書を引かずに演習していただけますか。

(5) プロトタイプの視点で語彙を認識することの例としては、fruit: apple, plum, pineapple, strawberry, fig, olive; vehicle: car, boat, scooter, tricycle, horse, skis; sport: football, hockey, wrestling, archery, gymnastics, weightlifting等を例にして解説された。

(6) 「語源の知識」の重要性を接頭辞、接尾辞、語根を例にして解説された。telephone, telescope, television等の説明をすれば中学生も嬉々として学習に参加する。指導者が語彙の背景的知識として修得していることの重要性の指摘である。

(7) スピーチ・レベルへの配慮(例: thusとexplicate)も、教師は知って指導をすべきである。

(8) 上記のような語彙内だけの知識のみでは、advice, explainの用法(語法)の説明が出来ない。文法(統語論)の知識と語彙(語形論)の知識の両方ともに、基本的な概念だけでも教師は習得していなければならない。

(9) 慣用表現の指導も大切である。例: Agreed! After you. Greetings! Congratulations! 等々。

(10) 最後に、上記のような情報を、Googleを使って検索・検証する方法を学んだ。

概略、上記のようなワークショップが豊富な例を基にして展開された。参加者が全員、終始熱心にメモを取りながら参加されているのが印象的でした。

感想:

(1) 最近の英和・和英・英々辞書には上記のような語法情報とともに、文法情報も記載されているので、指導する際には、語義のみではなくて、辞書に記載されている情報を読む指導を実施してほしいと思います。

(2) 国広哲弥『構造的意味論—日英両語対照研究—』(三省堂、1967)、国広哲弥『意味の諸相』(三省堂、1970)、服部二郎『英語基礎語彙の研究』(三省堂、1968)は、絶版ですので、図書館での一読をお奨めします。『現代英語学辞典』(成美堂、

1973)所収の国広哲弥・田中春美「日英語の比較」(pp.1011-27)、小島義郎『日本語の意味 英語の意味』(南雲堂、1988)等の書籍で、奥田先生が解説された内容の一部を、概略、理解することが可能です。言語学や英語学の専門用語を使わずに、語彙に含まれる諸相を解りやすく解説するワークショップであった。明日からの授業に直ちに活用できる多くの情報を習得できて、参加者は満足されたように思います。引き続き次回もワークショップを継続してほしい、との参加者の感想が今回の企画の成功を示す指標である、と言えます。

瀬川 俊一(京都府立大学名誉教授)

《実践報告1》

「中学校英語—問題点と私の工夫」

中西 美恵(和歌山市立楠見中学校)

この発表では、「1.生徒の理想の授業」、「2.現状・問題点」、「3.私の工夫」、「4.これから」という構成で、中学校の実際の授業で、どのようなことを行っているのかを説明された。専任校では、学生のレベルがあまり高くなく、普通の授業をするのが困難なこともあるようである。目標にされているのは、「英語のシャワーを浴びさせ、生徒から英語が出てくる授業」で、教科書教材を大切に、「一分間スピーチ」などを導入し、「聞く・話す」だけでなく、「書く」ことにも重点を置いているとのことであった。生徒に主体的に書かせるため、興味をもてる「和歌山のこと」、「遠足」、「修学旅行」をトピックに選んでいる。発表では、実際の学生の書いた作品が回覧されたが、レベルの高いものばかりだった。持ち時間を超えた発表であったため、このレベルまで持ってゆくの、どのような苦労があったのかをお伺いできなかったのが悔やまれる。

《実践報告2》

「高等学校英語—問題点と私の工夫」

宮井 博之(和歌山県立和歌山北高等学校)

この発表では、2年生全員を一人で担当するライティングのクラスの実践を通じて出てきた問題点と、その解決策を提示された。問題点としては、「同一パラグラフ内で何度も話題が変わる英文になる」、「物事を分析し自分の考えを表現する習慣が身に付いていない」など、ほとんどの日本人の英語学習者に共通するものがあげられていた。解決策は「パラグラフ・ライティングのフォーマットを示す」や「問題、課題(文化、経済、

政治)を提示し、それについて意見を述べさせる。グループ活動をさせ、発表させる」などである。学生の書いた文の添削例も資料にはあったが、予定時間を越えたため、説明していただく時間がなかったのが残念である。また、先生自身が、日頃、英語の疑問やトピックなどに着いて英語でメモしているノートを回覧されたが、英語に対する努力の跡が分かるものであり、参考にしたいものである。

《講演》

「Some Hints for the English Language Teachers」

Kevin Collins (和歌山大学)

この講演では、和歌山大学教育学部の授業で英語史を担当されている先生が、英語史の知識が現代英語の理解にどのように役に立つかを説明された。その中で面白い話を一つ。サイクリングで高野山に行くので、家を出る時に“Good-by.”と言ったのだが、台所でお皿を洗っている日本人の奥さんは、何も答えなかった。これに困惑した先生はずっと奥さんの気持ちが気がかりだったという。奥さんの方では、夫に向かって「さよなら」というのはおかしいと思い、“Good-by.”と答えなかった。しかし、英語史的に見ると Good-by. は God be with you. なので、「気をつけてね」という意味で言って欲しかったそう。また、the more ~, the more ~. という構文がなぜ、「...すればするほど...だ」という意味になるかについても、the はもともと by this much という意味の前置詞だった事を理解すれば簡単に説明がつくという事だった。また、資料の中古英語や中英語をすばらしい発音で読まれたのも、非常に面白かった。わかりやすい英語で、英語史の内容を具体例を挙げて話され、得した気分させられたのは私だけでではなかったであろうと思う。

奥田 隆一 (和歌山大学)

学会誌『英語教育研究 (SELT)』30 号の刊行報告 および 31 号原稿募集のお知らせ

『英語教育研究 (SELT)』30号が刊行されました。おかげさまで、30号には論文16編(依頼論文4本、投稿論文12本)を掲載することができました。投稿者および論文査読委員のみなさまに改めて御礼申し上げます。

すでにご承知のように、30号からは、親学会の

ARELE編集方針を参考に、原則として、当該年度のKELES研究大会および全国英語教育学会研究大会での口頭発表済み原稿をご投稿いただくことになっております。(上記大会での口頭発表を経ない論文の採択数には制限がかけられます。)したがって、31号にご投稿をお考えの方は、まず、5月のKELES研究大会でのご発表をお願いいたします。その後、当日の質疑応答なども踏まえ、十分に練り直したものを論文の形にまとめて10月末にご投稿いただければと思います。なお、31号の刊行スケジュールは下記のようになっております。

2007年10月1日	投稿受付開始
2007年10月30日	投稿受付締切
2007年11月30日	査読結果通知
2008年1月31日	修正原稿締切
2008年3月31日	刊行

31号への多くのご投稿をお待ち申し上げております。

紀要編集委員会
石川 慎一郎(神戸大学)

第33回全国英語教育学会大分研究大会のお知らせ

日時：2007年8月4日(土)、5日(日)

会場：大分大学教養教育棟

大会日程

8月4日(土)

9:00-9:30	受付
9:30-10:00	開会
10:15-12:30	自由研究発表・実践報告
13:30-16:00	課題研究フォーラム、問題別討論会
16:10-16:40	総会
19:00-21:00	懇親会

8月5日(日)

9:00-9:30	受付
9:30-12:55	自由研究発表・実践報告
13:50-16:20	シンポジウム

大会事務局：ymitarai[AT]cc.oita-u.ac.jp

発表申込：大会HPより(6月1日締切)

予稿集原稿：紙原稿と電子媒体(6月20日締切)

なお、詳細は[<http://www.jasele2007oita.info/>]をご覧ください。

今後のKELESセミナーの予定

KELES第6回セミナー(大阪地区)

日程：7月(予定)

内容：統計学に関するワークショップ

講師：交渉中

KELES第7回セミナー(神戸地区)

日程：10月13日(土)

題目：「小学校英語、Experiential learning(仮題)」

講師：横田 玲子氏(神戸市外国語大学)

KELES第8回セミナー(京都地区)

日程：12月15日(土)

題目：「英語教育に役立つインターネットサイト活用術(仮題)」

講師：石川 保茂氏(京都外国語大学)

事務局から

◇会費納入のお願い

2006年7月22日の総会にて改定が承認されました「会費についての細則」第3条により、2007年度の会費は、5月26日から開催予定の第11回研究大会までにご納入いただくこととなります。研究大会当日、受付にてご納入いただくことも可能ですが、混雑緩和のため、同封の払込取扱票にて最寄りの郵便局にてご納入くださいますよう、お願いいたします。納入の確認には郵便局でのご入金後3~4日を要しますので、第11回研究大会でご発表予定の方は、5月10日(木)までに会費のご納入をお願いいたします。また、第33回全国英語教育学会大分研究大会での研究発表やARELEへの投稿をご希望の方は、関西の年会費とあわせて全国の年会費をご納入いただく必要があります。

年会費は以下の通りです。

1. 一般会員(関西のみ)5,000円
2. 一般会員(関西+全国)7,000円
3. 学生会員(関西のみ)3,000円
4. 学生会員(関西+全国)5,000円
5. 賛助会員 12,000円

なお、会費納入に関するお問い合わせは、会計岡 良和[oka[AT]uhe.ac.jp]までお願いいたします。

◇新入会員紹介

(12月15日以降3月16日入金確認まで)

生田 好重
中里 好江
宮城 健
島 豊和
山本 みどり
大目木 俊憲
樋口 勝政

(敬称略、入会順)

◇紀要DVD販売のお知らせ

会員特別価格 3,000円

『英語教育研究(SELT)』過去28年分、『卒論・修論研究発表セミナー発表論文集』過去9年分(いずれも2005年度刊行分まで)をすべて電子化。鮮明な画像で論文を通読できるほか、OCRによるテキスト情報を埋め込みましたので、論文内の単語などでの検索も可能になりました(ただし、OCRの認識率は100%ではなく、完全な検索はできません)。

KELESの歩みの記録として、また、英語教育研究の必携情報レポジトリとして、ぜひお手元におそろえください。なお、購入に関するお問い合わせは、会計岡 良和[oka[AT]uhe.ac.jp]までお願いいたします。

事務局よりお願い

学会HPにて最新情報が随時更新されますので、頻繁に閲覧いただきますようお願いいたします。

KELES HP: <http://keles.hp.infoseek.co.jp/>